

人生をひもとく日本の古典

第六卷

目次

まえがき

I 死に向かう

1	黄泉路の一人旅——『懐風藻』大津皇子……………	2
2	ふさわしい終わり方——舞の本「高館」……………	6
3	自殺の理由——能「清経」……………	10
4	夫の身代りとなって死ぬ女……………	14
	——延慶本『平家物語』第二末「文学ガ道念之由緒事」	
5	母の命と胎児の命——『今物語』第二十五話……………	18
6	水底の「極楽」——『平家物語』卷十一「先帝身投」……………	22

II この世への思い

- 1 とにかく命は惜しい……………28
——鴨長明『発心集』卷三・八「蓮華城入水の事」
- 2 花鳥風月への愛着——源俊賴『俊賴髓腦』……………32
- 3 死後も自分が決められるのか？……………36
——本居宣長「遺言書」
- 4 母の遺言——説経「しんとく丸」……………40
- 5 祖母から孫へ——『源氏物語』御法卷……………44

III 遺された者の思い

- 1 死んだらどこへ行く……………50
——『万葉集』卷二・二〇八・柿本人麻呂
- 2 魂のありか——『和泉式部続集』……………54
- 3 もう一度逢いたい——夏目漱石『夢十夜』第一夜……………58
- 4 お葬式の悲しみ方——『誹風柳多留』十七篇……………62

IV 恋と死

- 1 露の命——『万葉集』卷八・一五六四・日置長枝娘子……………68
- 2 突然知らされた夫の死——『仮名手本忠臣蔵』第七……………72
- 3 死を急ぐ恋人たち——『妹背山婦女庭訓』第三……………76
- 4 レトリックを超えて……………80
——『万葉集』卷十五・三七七二・狭野弟上娘子

V 死と運命

- 1 客死——『古事記』中卷・倭建命……………86
- 2 人身御供で死ぬ人、死なない人……………90
——『日本書紀』卷第十一・仁徳天皇
- 3 もう、お迎えが——『伊勢物語』第一二五段……………94
- 4 予言された高僧の無惨な死……………98
——兼好『徒然草』第一四六段
- 5 人間五十年——幸若舞曲「敦盛」……………102

VI

死とは何か

1	無常といふ事——鴨長明『方丈記』……………	108
2	死の覚悟と死の夢想——山本常朝『葉隠』聞書一—二……………	112
3	僕らはみんな骸骨だ！——『一休骸骨』……………	116
4	少女が見た死体——『おあむ物語』……………	120
5	死の恐怖とは？——森鷗外『妄想』……………	124
6	死んだふり——『今昔物語集』卷二十九第十七話……………	128
解説	……………高田祐彦……………	133
付録	人名解説・作品解説……………	145

I

死に向かう

人が死を覚悟する時、死は生の対極や否定であるにとどまらず、生を超越し完結させるものとさえ捉えられる。本来ネガティブなはずの死が、ポジティブなものへと反転する機構には、死の美学と言うだけでは片付かない何かがあるはずである。

臨終

金鳥 西舎に臨らひ

鼓声 短命を催す

泉路 賓主無し

此の夕 家を離りて向かふ

金鳥臨西舎 鼓声催短命 泉路無賓主 此夕離家向



「懷風藻」大津皇子

大津皇子は、『万葉集』時代の漢詩人・歌人。

天武天皇の皇子で、母は天智天皇の皇女大田皇女。皇子としては草壁皇子に次ぐ位置にあり、

奈良時代の漢詩集『懷風藻』の略伝によれば、体はたくましくて、度量も広く、学問も修め、武術にも長じ、放埒な性格だが、人を敬うことも厚く、人々の信頼も絶大というような傑出した人物だったらしい。天武天皇の死後、謀反の罪によって詛語田(奈良県桜井市戒重)の宮で死を賜ったが、これは、我が子草壁皇子の強力な競争相手になることを警戒した持統天皇(鸕野讚良皇后)が

仕掛けた策謀によるものだと言われている。

右は辞世の詩で、二十四歳にして死に赴かねばならぬ我が身の運命について述べたもの。

だいたいの意味は、太陽が西の家屋を照らし、時を告げる太鼓の音が私の短い命をさらにせきたてるかのように響いてくる。死出の道には客も主人もおらず、自分ただ一人なのである。この夕べに我が家を離れて死への旅路に向かおうとしていることだ。

起句は、太陽が西に傾いて一日が終わる光景。それは同時に、大津皇子の人生の落日でもある。「金烏」は太陽(ちなみに月は「玉兔」)。

承句の「短命」という率直な表現からは、このような状況に陥った際の衝撃が生な形で伝わってきて、心打たれるものがある。

転句は、これまでは有力な皇子として身の回りにたくさんの人間が侍っていたのに、境遇が変わった今は一人ぼっちだという感慨がこめられていよう。「泉路」は、死出の道、黄泉路。

結句は、『群書類従』所収の本文では「此夕誰家向(此の夕、誰が家に向かはむ)」となっており、これだと「いったい一人どこへ向かおうとするのか」と訳するのがよいだろう。この方が、どうしてよいかわからない当惑した感じがよく表れている。翻って右に掲げた本文(天和四年(一六八四)刊行の『懐風藻』だと、淡々と自己の悲運を受け入れているイメージがある。どちらがよいのか判断に迷うが、粛々と運命を受け入れる王者の風格を感じさせるといふ理由で、一応後者の本文を掲げておいた。

二十四歳という若さで、しかも死が急に現実のものとなったなら、どのようにそれを受け入れたらよいのかは相当難しい。しかし、古代の人々は今のわれわれに比べてずっと身近なものとして死を意識していただろうし、まして右に説明したような微妙な立場にあった皇子なら、それなりの覚悟をもって日々を生きていたと思いたい。

なお、辞世歌としては、

ももづたふ磐余いはれの池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ
〔『万葉集』卷三・四一六〕

が伝えられている。磐余の池に鳴く鴨を見るのも今日でおしまいで、私は死んでいくのだからか、ということ。「磐余の池」は、訳語田へ行く途中にある。おそらく嘯目しやくもくの景なのであろう。

右の詩や歌は、もしかしたら後人の作が大津皇子の詠として伝えられたものなのかもしれないが、それはそれとして、作者をめぐるイメージを楽しんだり、死をめぐることばそのものを味わえばよいだろう。

大津皇子作とされる歌には印象的なものが多い。個人的に好きなのは、思いを寄せていた石川いしかわ郎女いらつめとの贈答歌である。まずは、大津皇子が詠み掛けた歌から挙げる。

あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに
〔『万葉集』卷二・一〇七〕

山の雫に、恋しい彼女を待つというので、私は立ち続けて濡れたことだ、この山の雫に。「山の

しづくに」を繰り返すところからは、どんなに濡れても私は待ち続けるという強い意志を感じ取られて、好ましい。そして、山の雫をまるで恋人のようにいつくしみたいという気持ちも感じ取れると思う。そんな彼の思いに対して、石川郎女は次のような歌を返している。

我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを（『万葉集』巻二・一〇八）

私を待つて下さるというのであなたが濡れてしまわれた山の雫になれたらどんなによいでしょう。「まし」は、反実仮想の助動詞で実際にはそうでないことを仮定して述べる時に用いる。山のものになることはできないのですけれど、そうなれたらどんなにかよいのに、というニュアンスである。雫になってしまいたいとまで訴えかけて待つような気持ちの中に、相手を求める切実さが強く感じ取れて、恋をするという行為が持つ深奥にまでたどり着いたような感触を得ることができさる。

〔鈴木健一〕

ふさわしい終わり方

武蔵に当るその矢は、蘆あしを束たばねて檼まきの板戸ふを突つく風情ふうせい。本もとより死したる
弁慶べんけいにて、その身をちつとも痛いたまず。



舞の本「高館」
たかだち

有名な「弁慶の立往生」である。より正確に言えば、立ったまま往生した直後のシーンだ。しっかりりと足を踏ん張り長刀ながなたを突ついて立たっている弁慶がまさか死しんでいるとは思おぼわぬ敵方は、「あら、恐おそろしや。又また弁慶が人を切きらんずる謀はかりごとよ。近ちかふ寄よては叶かなふまじ。遠とほ矢やに射やよ」と、次々つぎつぎに矢やを射やかけてくる。偉丈夫ゐぢうぶの弁慶の身体みに無数の矢やが突つき刺ささる様よう子を「束たばねた蘆あしで板戸ふを突ついたよう」という比喩ひよは身みも蓋ふたもないほどの確たしかで鮮烈せんれつであり、また、そんな風ふうになっても既に死しんでいるのだから「その身をちつとも痛いたまず」という即物的な説明せつぶつていには、感傷かんかうを捨すてたハードボイルドの趣おもむきが漂ただよっている。

義経主従一行は、奥州平泉こうしゅうへいせん、衣川えがわ近くの高館たかだちで最後の戦いくさを戦いくさう。文字通り一騎当千の忠臣ちゆうしんたちが圧倒的に数の多い追討軍おいつくせんを相手に思おもう存分ぞんぶん戦いくさい死しんでいく様ようは壯観さうかんだが、その最後さいごを飾かざるのが

弁慶のエピソードだ。その奮戦ぶりは、

怒れる眼は、黒雲の所々の晴れ間より、朝日の映るふごとくなり。敵を靡けて喚く声、雷電、稲妻、霹靂、獅子、象、虎の吼ふる声も、かくやと思ひ知られたり。

というものだった。喉笛を射られ瀕死の重傷を負った弁慶が、義経やその若君と別れを告げる場面も哀れだ。義経は「弁慶が最期に、酒を飲ませよ」と主従二世の契りの盃を与え、弁慶はそれを飲み干すが、射切られた喉笛からその酒が血とともに流れ出てしまう。いよいよ最期であるのは明らかだ。誰もが弁慶は自害をすると思った。敵は「大剛の者の自害の様、いざ見習ひて手本にせん」と押し寄せてくる。それを見た義経は「兼房は防ぎ矢射よ。弁慶は腹を切れ。御経せんずる間」と指示を出す。当の弁慶は長刀に縋って立ち上がり、なんと、またもや戦いに出ていくのだ。恐れをなして退いていく敵を追って衣川の向こう岸に渡り、十数騎を切って捨て、もう一度義経のところへ戻ってこようとすることがさすがに力尽き、「次第に性根乱るれば、西向につつ立て、長刀真砂に揺り立て、光明真言唱へつゝ、生年三十八にして」立往生を遂げたという。それに気づかぬ敵方が、既に死んでいる弁慶を矢ぶすまにしたわけである。

弁慶に関して語られているさまざまエピソードは、みな伝説と言ってよい。母の胎内に三年居たという話を信じる人はいないだろうが、比叡山を追われるほどの乱暴者だったことも牛若丸

との出会いも、不運の義経にびったり寄り添い最後まで守ってきた忠義も、その智恵や胆力も、文学的なフィクションである。もちろんこの死に方だってフィクションだと言ってしまうえばそれまでだ。だがそうであるにしても、いやそうであるからこそ、弁慶の最期もまた、彼のキャラクターや人生に実にふさわしい終わり方として完成している。義経と出会ってからの弁慶の人生は、この立往生に向かつてまっすぐに伸びてきたかのように見え、そこにある種の居心地の良さを感ずることが出来る。それは、非業の死を遂げた友人について「でもあの人らしい最期だった」「颯爽と駆け抜けて行ったんだ」などと言って自らを慰めるのと似ているかもしれない。たぶん我々は無意識のうちに、死ぬということまでを含めて人生だと考えていて、生き方にふさわしい終わり方を見ると少し安心したり感動したりするのだろう。

そしてこの安心や感動は、悪人が悪人らしく死ぬ時にも同じように感じられるらしい。説経節『山椒太夫』の結末近く、領地を受け権力者となった厨子王は峻烈な信賞必罰をおこない、山椒太夫の首を突の息子たちに鋸のこぎりで挽かせて処刑しようとする。太郎と次郎は父親の首を生きたまま鋸で挽くことなどできず、「だからあんな罪深いことをしなければ良かったのだ」などと嘆くが、悪の権化のような三郎はそうした兄たちの様子を「卑怯」となじり、父に向かっては、

なふいかに太夫殿。一期申念仏をば、何時いつの用に立給ふぞ この度の用にお立てあれ。死
出三途でさんずの大河をば。此三郎が負ひ越して参らすべきぞ。

と言つてのける。大悪人の父親のことは同じく大悪人の自分が背負つて三途の川を渡つてやるう
という開き直りだ。しかも親の首を鋸で挽くなどというおぞましい所業も、嘆くどころか「一引
引きては千僧供養。二引引いては万僧供養。ゑいさらゑい」と自分で嘯しながら完遂し、その後
は自身も山人達の鋸に挽かれ、七日七夜かけて処刑されたという。因果応報と言つてしまえばそ
れまでだが、これも生き方にふさわしい死に方である。

一方の太郎や次郎は、飢える安寿と厨子王にこっそり食べ物を分け与えたり、寺に隠れた厨子
王が今にも見つかるという時に追っ手をなだめてくれたことよつて、残虐無比の山椒太夫の家
族としてぬくぬくと生きていたことも、その家業を支えていたことも、すべて許され領地までも
らうことになる。わずかな慈悲や仏への畏れが報われるのは中世庶民の倫理観には合うのだろう
が、やはり釈然としない。三郎と声を合わせ「卑怯なりや方々」となじつてみたくもなる。

勇者があくまで勇者らしい最期を遂げるように、悪人が徹底的に悪人として、つまらぬ後悔も
言い訳もせず悪の道を全うするのは、それはそれで潔い。現実の世界では許しがたい人物像や生
き方が妖しい魅力を放つのは、文学の醍醐味である。そういう意味では、弁慶の立ち往生と同じ
く三郎の死に方も、強烈な印象とある種の感慨を与える立派な死に方と言えるのかもしれない。

〔山中玲子〕